ハワイ英語で使われている日本語起源借用語

ダニエル　ロング・長門 正大

1.　ハワイ英語の言語変種

ハワイ英語では多くの日本語起源の単語が日常的に使われている。本稿の目的は、本格的な研究に向けて、そうした単語五十数個を拾い集め、発音や意味、使用されるスタイルや使用する民族集団に関する聞き取り調査の結果を踏まえて、今後の研究要因を模索することにある。

日本語じたいがハワイで使われることがあるため、そのような形で日本語の単語をハワイで聞くこがある。一方、ハワイの英語変種の中でも日本語起源の単語が借用語として使われることがある。ハワイで話されている様々な英語変種は連続体を成している。身内が話すくだけた場面で使われるものは低位変種(basilect)と呼ばれ、これは「ハワイクレオール英語」(Hawaiian Creole English、以下 HCE)のことを指す。また改まった場面で使われる高位変種(acrolect)は「ハワイ標準英語」(Hawaiian Standard English, HSE)と呼ばれている(Carr 1972)。本稿ではこれらの変種とその間に位置づけられる中位変種(mesolect)をまとめ、「ハワイ英語」という総称を用いる。

現在話されている HCE は 20 世紀前半に形成されたものである。19 世紀後半にハワイにやって来た移民の間で共通のコミュニケーション手段として使われたピジン英語(HPE)から発達したのである。ハワイ語を母語とするハワイ先住民に加え、英語を話すアメリカ本土からの人々や、中国語、日本語、ポルトガル語、スペイン語、琉球語、韓国語、タガログ語などを母語とする移民の存在もあり、その結果複雑な背景を持つ多民族・多言語社会ができたのである。この多民族・多言語社会の中で生まれた文化接触がフィクションとして Hatta(1994)の映画で描かれている。ピジンやクレオールの使用者は単純労働者で社会的身分が低かったことに加え、標準英語が話せないのは低能力だと見られたため、ピジン・クレオールは「間違った英語」として見なされ、言語差別の的となった。

HCE を使っている話者は一種の自己嫌悪感（方言コンプレックス）を抱いていると思われ、Hatta (2005)の短編映画では現代におけるこうした劣等感が興味深く描がかれている。HCE は大多数のハワイ住民に母語として用いられ言語学的に言えば完全な言語体系であるので、標準英語と比べ怠っているとみられるのは単なる社会的偏見であり、言語学的な事実ではない。なお、ややこしいことに一般人の間で HCE はいまだに Pidgin（ピジン）という呼び名で親しまれている。

近年になって、HCE を使う聖書や文学作品が出版されており、社会的レベルが少し上がってきていると感じる(Pidgin Bible Translation Group 2000, Yamanaka 1996)。また言語学者や運動家が HCE の正当性を訴える動きもある(Booth et al. 2009, Paguriga et.al. 2009)。し

かし、社会的地位の問題はそう簡単に改善されるものではない。

一方、高位変種のHSEは米国本土の標準英語とさほど変わらない。ハワイ独特な語彙が使われたり、音声面で微妙な違いが現れたりする程度である。例えば、本土英語で[ou]や[ei]の二重母音として発音される[bout]*boat*（船）や[feis]*face*（顔）はHSEで長母音[bo:t]や[fe:s]と発音される。

日本語起源借用語(JOL、Japanese Origin Loanwords)の発音がハワイ英語と本土英語で異ることもある。本土英語で「津波」は[sunami]と発音されるが、ハワイ英語では[tsunami]のように日本語の原音に近い発音である。同様に日本語のラ行子音を持つ借用語(*karate*など)は本土英語では英語の普通の"r"の発音（歯茎接近音[ɹ]）となるが、ハワイ英語（HCEからHSEまで）では日本語とほぼ同じ「弾き音」[ɾ]で発音される。この子音は/l/や/r/、/d/のいずれとも区別さえる点から、ハワイ英語独自の特徴として音素/ɾ/の存在を主張することができる。ハワイ英語で使われるJOLには本土英語の発音とも元の日本語の発音とも異なる場合があるが、詳細は本稿の6節で解説する。JOLと元の日本語で意味の違いも見られるが、それは4節で取り上げる。なお、本土英語とハワイ英語の最も大きな違いは、JOLの単語そのものが本土英語で使われない点である。

2. 先行研究

本稿のテーマと関連する文献は(1)ハワイの日本語の特徴に関する文献、(2)ハワイ英語に関する文献、(3)英語におけるJOLに関する文献、の三種類に分けることができる。(1)としての比嘉(1974ab)や井上(1971, 1999)、安倍(1965)、黒川(1975ab, 1976, 1978, 1979, 1983) などが挙げられるが、これらは「ハワイ英語」で使用される日本語ではなく、ハワイにおける日系人コミュニティ内での日本語をテーマとするものである。このテーマの研究史の記録として足立(1983)、阿刀田(1975)、ウエハラ(1965, 1966)、大島(1976)、針本(1964,1965,1966)、小林(1982)、塩田(1967)、武田(1968)、野元(1973, 1974)なども挙げておく。(2)として挙げられるCarr (1972)やNagara (1972)、Reinecke (1969), Bickerton & Odo (1976)、Bickerton (1977)は確かにハワイ英語における日本語の影響をテーマとしているが、これら研究の語彙に関する情報は部分的なものであり、文法や音韻体系の解説が中心である。(3)の英語一般におけるJOLの研究にはGarland Cannon (1981, 1996)やLong (1997, 2001)の研究が挙げられる。

まさに、本稿のテーマである「ハワイ英語における日本語起源借用語」に関する論文は少ない。島田・高橋(2012)は *ogo* という一つの単語を細かく、深く掘り下げている。島田他(2014)は *hinoshi* と *giri-giri*, *shibi* の3語に関する考察である。この他の研究も島田(2006)やハナシロ・島田(2011)などにとどまるのみである。

本研究では、島田らの「狭く深く」の研究と違い、「広く浅く」ハワイ英語のJOLを網羅することで、JOLの全体像を把握し、それを記述することを最終目標としている。本稿で取り上げるハワイ英語で使われる五十数個のJOLは氷山の一角だと思われるが、筆者の目指す目標への第一歩であると考える。

3. 調査概要

2014年10月27日、筆者の二人がハワイ大学で教鞭をとるKent Sakodaの協力を得て、ハワイ英語におけるJOLに関する本格的な研究を行ううえでの予備調査として聞き取り調査を行なった。SakodaはHCEの母語話者であり、その研究の第一人者とも言える。Sakoda & Siegel (2003)の筆者の一人であり、Paguriga et al.(2009)やBooth(2009)などに登場するHCEの解説者であり、調査協力者として適切な話者だと判断したのである。調査方法は、筆者がSimonson et al. (2005)やTonouchi(2005)、Sakoda & Siegel (2003)などから予め拾っておいたJOLと思われる単語をSakoda氏に提示しその発音や意味論的特徴、文における具体的な使い方、社会言語的使用状況などについて解説してもらうという方法をとった。表1に記述したのは、ハワイ英語の単語（つづりは一般に使用されているものや発音を反映したもの）、起源と思われる日本語、日本語訳（意味変化が起きている場合）、英語訳である。右の「解説欄」にSakoda氏からのコメントなど、追加情報を記した。本研究の長期的目的の一つはJOLがハワイの日系コミュニティを超えて、中国系、ポルトガル系、フィリピン系などの話者にも使用されているかどうかということであり、単語がこのように「汎民族的 (pan-ethnic) になっている場合にそのことを表に記述した。

表1　ハワイ英語で使われる日本語起源の単語

ハワイ英語の単語	日本語起源語	日本語訳	英語訳	解説
atsui	熱い	セクシー	hot stuff	英語の *hot* からの逆翻訳か。
atta atta	あった	見つかった	I found it!	促音をしっかり発音する。日系のみ使用。
bachan, baban	ばちゃん	中年女性	middle-aged woman	*obaachan* とは長音の有無で区別。詳細は6.2節のbachan項参照。
bachi	ばち	だめにする。壊す	Japanese curse	「ばちが当たる」の「ばち」。使い方はDon't bachi that!のようになり他動詞として扱われる。汎民族的。
bakatare	馬鹿たれ	頭の悪い人	fool, dumbass	日本語と違って呼びかけとして使われず、言及のみで使われる。使用例：he real bakatare。汎民族的。
baka	馬鹿		fool, dumbass	一世しか使わないため、古めかしい感じがする。日系のみ使用。
banzai	バンザイ	おめでとう	Japanese cheer	結婚式や誕生日などのお祝い事の時に使う。アメリカ本土では戦争が連想されるので用いられない。汎民族的。
benjo	便所	お手洗い	toilet	chozuよりも一般的な言い方。
bento	弁当		Japanese-style box lunch	外出先で食べるために持っていく食べ物。料理店などで出す、主食と副食を箱などに詰めたもの。汎民族的。

bobura (head)	ボーブラ	日本本国から来た日本人	Japanese from Japan	頭がかぼちゃに似ていたことから。詳細は 6.1 節の *bobura* 項参照。
bocha	ぼちゃ	風呂	bath	ぼちゃというオノマトペから。汎民族的。詳細は 4.2 節の *bocha* 項参照。
boro-boros	ぼろぼろ	ぼろい服, ぼろきれ	worn-out cloth	借用起源に関しては二つ考えられ、ぼろきれ、あるいはぼろぼろな服であると推測される。
buri	鰤	ブリ	amber jack	レストランなどで使用される。
Buddah head	ブッダ	日本本国から来た日本人	Japanese from Japan	*bobura* と同義。語源は *bobura head*。詳細は 6.1 節参照。
chawan cut	茶わん	ぼっちゃん刈り	pudding bowl hair cut	その髪型が茶わんに似ていたため。
chicken skin	鳥肌		goose bumps	翻訳借用。ポルトガル語からの可能性も考えられる。
chimpo	ちんぽ	男性器	male genitalia	
ching-ching	ちんちん	男性器	male genitalia	発音が[ŋ]になっている。
cho-cho lips	蝶々	たらこ唇	thick lips	蝶々のような唇という意味の造語であると考えられる。
chozu	手水	トイレ	toilet	Sakoda 氏の祖母が使っていたが、今ではとても古く感じる。
daikon legs	大根	大根足	short and white legs	部分的な翻訳借用語。
fai fo fo	five four four *5-4-4* go しーしー	小便する	to go to the bathroom	トイレに行くこと、小便すること。詳細は 6.3 節の 5-4-4 項参照。
giri-giri	ぎりぎり	つむじ、立ち毛	cowlick a hair whorl	江戸時代ごろには「つむじ」を表す為に「ぎりぎり」と用いていたことが語源であると考えられる。島田 (2014)
habut, habuts, habuteru	はぶてる	怒る、すねる	be angry	「はぶてる」という中国地方方言から。*habuteru* が短縮され *habut* という形になったもの。詳細は 5.2 節の habuts 項参照。
hadaka	裸		naked	
hadashi	裸足		bare feet	一時期は汎民族的に使用されたが、後に日系人のみでの使用に限られるようになった。日系人のみ使用。
hamachi	鮄	ハマチ	amber jack	レストランなどで使用される。
hanabata	鼻バター	鼻水	runny nose	*hanabata days* のように使用する。鼻水が止まらない様子を表す。鼻とバターからの造語。
hanakuso	鼻くそ		nasal mucus, buggers	日系人のみ使用。

heka *hekka*	へか	青ネギの入ったすき焼き	sukiyaki with green onions	*chicken heka* のように用いられる。元々はそれに使う鍋自体のことを表す言葉だった。「へか」（焼き）という方言が語源であると考えられる。
hinoshi	火熨斗	アイロン	iron (for pressing clothes)	島田他(2014)で引用されるハナシロ調査によると非日系や若年層の使用は無いに等しい。
kagami	鏡？	アジ類の魚	jackfish	ハワイ語では *ulua* と呼ばれる。*kagami-ulua* という複合形も存在する。日本語の起源語の検討が必要。
kapamaki	かっぱ巻き		rolled cucumber sushi	促音は発音しない。
karai	辛い		spicy, hot	日本語的な発音をする。
kotonk	ことん	アメリカ本土からの日系人	Japanese American	頭を叩く時のことんというオノマトペから。詳細は4.3節の*kotonk*項参照。
mempachi	メンパチ	イットウダイ類の魚	squirrelfish	広島など日本各地の方言にメンパチという魚名があるが、指す魚が異なるので検討が必要。汎民族的。
mejiro	目白	メジロ	white-eye	ハワイの図鑑類にも使われるほど正式名称として認められている。
musubi	結び	おむすび、おにぎり	rice ball	*musubis* の複数形がある。日本語は「おむすび」だが、「お」がつかない。汎民族的。
obake	お化け	幽霊	ghost	汎民族的。
obaachan	おばあちゃん	祖母	grand mother	*baban* という変異形も存在する。
obachan	おばちゃん	中年女性	middle-aged woman	詳細は6.2節の *bachan* 項参照。
ogo	海髪	紅色の食用の海藻	type of edible seagrass	奈良時代より使われ始めた語であり、それが方言に残りハワイへと渡ったと考えられる。(島田・高橋 2012: 85)
ojiichan	おじいちゃん	祖父	grand father	*jiji*, *ojiji* という言い方も存在する。
ojichan	おじちゃん	中年男性	middle-aged man	*ojiichan* とは長音の有無で区別する。
omeko	おめこ	女性器	female genitalia	標準日本語ではなく、方言からの借用である。
shibai	芝居	嘘をつく	lying	主に政治家について使う。日系のみ使用。詳細は4.1節の *shibai* 項参照。
shibi	シビ	黄肌鮪（特に未成魚）	yellow fin tuna, ahi (esp. young)	奈良時代より使われ始めた語である。非日系人による使用は限られる。(島田他 2014: 509)
shishi	しーしー	小便（する）	pee or act of peeing	*time to go shishi* のように使われる。

slippah	スリッパー		slipper	日本語の「スリッパー」のように発音する。日系人のみ使用。
tantaran	足らん	見せびらかす	show off stupid	詳細は6.4節の *tantaran* 項参照。
teka maki (tekka maki)	鉄火巻き		rolled tuna sushi	促音は発音しない、または短く発音する。詳細は5.1節の *teka* 項参照。
uguisu	鶯	ウグイス	bush warbler	ハワイ諸島のMolokai島でよく使用される。
zoris	草履	ビーチサンダル	sandals	一般的に複数形の"s"を付けて使用される。

4. 意味の特徴

ここではハワイ英語において起源となる日本語の単語と意味の異なる語をいくつか取りあげて検討する。内容はKent Sakodaを対象にした調査で得られた情報である。以下で「意味領域の縮小」(shibai)および「オノマトペから名詞への変化」(bocha, kotonk)という二つの意味変化現象を考察する。

4.1. *shibai*（嘘）

ハワイ英語には *shibai* という言葉が存在する。ハワイ英語における意味は「演技をする」(Sakoda and Siegel 2003: 115)、「嘘をつく」(Simonson et al. 2005; Tonouchi 2005: 82)であるとされている。この *shibai* という語は日本語の「芝居」という語が借用された結果である。『明鏡国語辞典第二版』（北原2010）は芝居という語の意味を(1)演劇。特に、歌舞伎・文楽・新派など、日本的な演劇をいう。(2)役者が行う演技。(3)人をだますための作り事をすること。またその作り事。であると定義している。ハワイでの *shibai* の意味は(2)と(3)の意味からきていると考えられる。Sakoda氏によると現在この単語は政治家にしか使われず政治家の行いや振る舞いに対して、彼は嘘をついているという意味で *He all shibai.* のように用いられる。このことに関して本来は日本語の「芝居」がそのまま借用され意味も本来の意味で用いられていたものが、時間が経つにつれ政治家のみのように対象を限定的に使用されるようになった結果であると考えられる。その結果現在のハワイでは「(政治家に対して) 嘘をついている」という日本語にはない意味を持つようになったのである。

4.2. *bocha*（風呂）

この *bocha* は日本語の「ぼちゃ(ん)」というオノマトペが借用された結果である。日本語ではこのオノマトペは何かが水に落ちる等したときに用いられるのであるが、その語に「お風呂」という意味が付加され、またオノマトペ的な意味を失った形でハワイでは使用されている。使用例は *Time to go bocha* のようになり、名詞あるいは「お風呂に入るということ」のような動名詞であると考えられる。またぼちゃんという音が英語の

bath に音が似ていることも何らかの影響を持っているのではないかと考えられる。

4.3. kotonk（アメリカ本土から来た日系人）

Kotonk という語は「アメリカ本土からの日系人」を表す単語である。語源は「ことん」というオノマトペで、Sakoda 氏によると頭を叩いたときの音が「ことん」といったことから名づけられたようである。この言葉が生まれたのは第二次世界大戦の時であるが、この時同じ日本人をルーツに持つ日系人同士でも争いが起きていた。その中で、「アメリカ本土から来た日系人」は *kotonk*、「日本本国から来た日本人」は *bobura head*(かぼちゃ頭という意味のJOL、*buddah head* も同義)という互いに揶揄する語が生まれたのである。

5. 発音の特徴

ハワイ英語に存在する JOL の音声学的・音韻論的特徴は大きく分けて二種類ある。一つは日本語の単語がハワイ英語に入る段階でその単語の発音が変化したもので、本章では起源語に存在する促音が脱落する「脱促音化」(*teka*、*kapa*、*atta atta*、*heka*、*hekka*)という現象について考察を行う。もう一つの特徴は日本語の単語がハワイ英語に入る段階でハワイ英語の音韻体系に影響を与えたものであり、本章でハワイ英語に存在する「音素としての弾き音」(*karai*、*karate*)、及びアメリカ英語にはない特徴として「語頭の[ts]」(*tsunami*)を取り上げ考察を行う。また英語に共通する音韻体系が発音を通して綴りに影響を与えたもの(*ching-ching*)に関しても本章で検証する。

5.1. 脱促音化

ハワイでは鉄火巻きの発音は *teka* となり、促音の発音にならない。同様の現象は *kapa maki*（かっぱ巻き）にも見られ、ここにも現代ハワイ英語における JOL の脱促音化がみられる。一方、JOL として使われている *atta atta* について確認したところ、この語は促音の発音は残っており、*ata ata* のように発音されないことが分かった。このことから全ての JOL において脱促音化が起きるわけではないということが言える。このような語には他にどのようなものが存在するのかといったことを引き続き調査する必要がある。

ハワイ英語には日本語の「へか(すき焼きのような鍋料理あるいはその鍋を指す方言)」を起源に持つ *heka* あるいは *hekka* という JOL が存在している。促音のない「へか」という語が起源であるのに促音を有する形の *hekka* が存在する理由として過剰修正が考えられる。ハワイにおいて脱促音化した *teka* や *kapa* の影響を受け、本来促音を持たないはずの *heka* も *tekka*、*kappa* のように促音を持つ形が"正しい"日本語であると考えられ、*hekka* というハワイ独特の変化を受けたということである。またあるいはそれらの促音の有無などの特徴を有する語を混同してしまっていることも理由の一つとして考えられるため、このことに関してもさらなる調査を行う必要がある。

5.2. 音素としての弾き音

5.1.では日本語の単語が JOL としてハワイ英語に入った際にその単語が受けた音韻的変化について記述したが、以下では日本語の単語がハワイ英語に入ったことでハワイ英語の音韻体系が受けた影響について記述する。

ハワイ英語は接触変種であるため、本土英語と異なる音韻体系を持っている。本土英語には日本語のような「弾き音」[ɾ]は音素として存在しないが、ハワイ英語にはそれが存在する。Sakoda and Siegel(2003: 21)はハワイ英語での「弾き音」の存在に触れ、それらの音が JOL の中で確認されるとしている。この音を表す為の「発音表記」として大文字の"D"を用い、"kaDai" [karai]（辛い）、"kaDate" [karate]（空手）]等の例を挙げている。

5.3. 語頭の[ts]

また、本土英語において[ts]は（語尾の *gets* に表われるものの）音配列規則によって語頭にくることは許されていない。したがって、日本語の「津波」が本土英語では[sunami]となる。しかし、ハワイ英語では日本語の原音に近い[tsunami]という発音が用いられる。一方、ハワイ英語には本土英語と異なる音もある。例えば *try* のハワイ英語での発音は[tərai]のようになり、同様の現象が *three* の発音[təri]などでも確認することが出来る(Sakoda and Siegel 2003: 26)。

5.4. 英語の音韻体系による影響

英語の音韻体系では、弛緩母音の後に来る鼻音は[n]、緊張母音の後に来る鼻音は[ŋ]になるという相補分布の状況がある。この音韻体系は綴りにも現れており、弛緩母音を有する語は *sin*[sɪn]や *thin*[θɪn]と、緊張母音を有しているものは *sing*[siŋ]と *thing*[θiŋ]のようになる。JOL の発音（そして綴り字）にもこの影響が見られる。例えば「男性器」を意味する JOL は *ching-ching*[tʃiŋ tʃiŋ]である。起源語は「ちんちん」[tʃin tʃin]であるが、なぜ[n]→[ŋ]の変化が起きたのであるか。この語の母音がハワイ英語に借用される際に緊張母音の[i]であると捉えられたためその後に来る鼻音も規則にのっとり[ŋ]に変わったのであろう。その綴りがその発音を反映する *ching-ching* となっているのである。

6. 多面的な要因

単語によっては音韻論的な変化も意味論的な変化を両方とも伴う物がある。以下では意味が変化した際に、「長母音の変化を伴うもの」(*bobura*、*bachan*)、「ハワイ独特の変化を受けたもの」(5-4-4、tantaran)について考察する。

6.1. *bobura*（日本本国から来た日本人）

Bobura という語にも興味深い点があることが今回の調査で明らかになった。Sakoda 氏によると日本本国から来た日本人（すなわち日系アメリカ人ではない人）のことを指す語であり、彼らの頭がかぼちゃに似ていたからそう呼ぶようになったとのことである。

氏によると、*bobura* という語は日本の方言で「かぼちゃ」を表す「ボーブラ」に由来する。「ボーブラ」や類形の「ボブラ」、「ボフラ」、「ボーフラ」等が日本に点在することが明らかになっている（平山輝男 1992：1262-1263）。ハワイの日本語への影響が強い広島方言・山口方言（比嘉 1974b: 29）にも「ボーブラ」という語が存在することから、ここからの借用であると考えられる。またこの日本語での「ボーブラ」の語源は外来語であり、かぼちゃを表すポルトガル語の *abóbora* であるとされている（平山輝男 1992：1262-1263）。外来語として伝わった語が日本における方言として残りハワイに伝わったということである。Sakoda 氏の説明を受けて浮かび上がった新たな疑問点として、長母音の有無がある。氏によると「ボブラ」あるいは「ボボラ」のように発音するとされており、起源語である「ボーブラ」に見られる長母音が消失している。これに関しては標準英語での借用の際に見られる長母音の消失の影響があると考えられるが、さらなる調査が必要であると考える。

表２　bobura の変遷（作業仮説）

abóbora →	ボーブラ →	*bobura* →	*bobura head* →	*buddah head*
葡語	中国地方方言	HCE	頭の形から連想	民間語源（アジア人＝仏教）

6.2. *bachan*（中年女性）

Sakoda 氏から *obachan* という語に関しても興味深い説明を受けた。この語の語源は「おばちゃん」、あるいは「おばあちゃん」であることが推測される。そして「おばちゃん」には他人である中年の女性を呼ぶ語として「小母ちゃん」、両親の姉妹を指す呼称としての「叔母ちゃん・伯母ちゃん」、また「おばあちゃん」にも老年の女性を指す語として「お婆ちゃん」、祖母を呼ぶ際に用いられる「お祖母さん」という語がそれぞれ存在する。これらの意味を長母音の有無で使い分けるのである。知らない女性にたいしては *obachan* を用い、自身の祖母にたいしては *obaachan* のように長母音で発音する。この説明を受け新たな疑問が浮かび上がった。親族への呼称としての「叔母ちゃん・伯母ちゃん」の表現方法が不明であること、標準日本語の正式な呼称は「おばさん」、「おばあさん」のように「さん」を付ける呼び方でありその呼称がハワイピジン語に入っているかということである。また *Pidgin to da Max* (Simonson et al. 2005)には日本人の高齢の女性を指す語として *bachan* という語が記載されており別の呼び方として *obachan* という語があると紹介されていることから、「お」がついていない呼び方が標準的に用いられている可能性もある。Sakoda 氏との対談の中で祖母を表す語として *baban* という表現も確認されており、これらのことに関してはさらなる調査が必要であると考える。

6.3. 5-4-4 [fai fo fo]（小便しに行く）

この表現は下品で冗談っぽく使われるとは言え、起源が極めて複雑であり、言語学的に興味深いことには変わりがない。Simonson et al. (2005)では、数字の「5-4-4」の発音記

号として「fi-fo-fo」と記されている。HCE の話者に確認したところ、これは[fai fo fo]と判明した。つまり一般人向けに書かれた Simonson は five の省略として fi を使っているだけであり、「5-4-4」の発音（読み方）は[fai fo fo]とのことである。意味は"to go to the bathroom"とあるので、「小便する」と日本語訳できるが、広く言えば「トイレに行く」ことである。英語の go＋小便を表すハワイ英語の JOL である *shishi* からの造語である。この *go shishi* を一旦バイリンガルな語呂合わせで"5-4-4"という数字に置き換えてから、この数字を再び英語として読み直して、*five-four-four* の最初の音をとり[fai fo fo]となったと思われる。日本でもアメリカ本土でも考えられないハワイならではの造語である。

6.4. *tantaran*（バカ、みせびらかす）

この *tantaran* という語は音韻的、意味的に非常に複雑な変化を受けた語である。この語のもっとも古い起源となる日本語は「半分足りない」である。バカな人を揶揄して「(頭が）半分足りない」と言っていたのだが、やがてなまり「足らん」となり、その後「足らん足らん」と言われるようになった。さらにタガログ語で同様に「馬鹿な人」を指す語である *tarantado* の影響も受け、現在の *tantaran* という形になったのである。

この *tantaran* という語は、使用され始めた初期は日本語、及びタガログ語と同様に「馬鹿な人」を指す語であった。しかしその語感がファンファーレに似ていることから「見せびらかす、目立とうとする」などの意味が生まれ現在はその意味での使用に限られるのである。

7.　干渉・転移

ハワイ英語で atsui を「セクシー、みだらな」という意味で使う。漫画風に書かれたハワイ英語の解説書 *Pidgin to da max* (Simonson et al. 2005)では「色っぽい」という意味で使っている例がある。男性同士がセクシーな女性について会話を交わしている場面である。

男性 1: Atsui, yeah?　（セクシーだよね。）

男性 2: Fo' real!　（だよね。）

この語の起源となる日本語の「あつい(暑い、熱い)」にこのような意味は無い。一方、英語の *hot* はこのような使い方をされることがあり、つまりこれは英語を日本語に直訳した後、その「ニホンゴ」をハワイ英語に取り入れた結果生まれたものであると考えることが出来るのである。

これは日系人が使う英語における言語干渉の現象であるが、海外の日系人が使う日本語にも似た現象がみられる。英語で「野球をする」ことを *play* と表現する。ハワイの日系人が日本語で話す時に、英語の干渉をうけて、「野球を遊ぶ」という言い方を使う。ポルトガル語やスペイン語においても球技の場合に *jugar*（遊ぶ）を使うため、南米の日系人が使う日本語にも同じ現象が見られるのである。

8. 日本語の方言

ここまでは日本語からハワイ英語に入ったことでその語に起きた変化、あるいはその後がハワイ英語に与えた影響などについて記述してきたが、本章ではその起源となる「日本語」に関する考察を行う。上述の 4-7 節では日本語からハワイ英語に借用された際に起きた変化について考察を行ったが、その借用された日本語そのものに関する研究は多くなされてきた。井上(1971)、比嘉(1974a、b)はハワイ独特の日本語、つまり「ハワイ日本語」の存在について言及しており、その「ハワイ日本語」には広島、山口等の中国地方方言の使用が見られるということが特徴として挙げられている。そして多くの JOL にもその影響が見られるのである。例えば *habuteru* という語の起源と考えられる「はぶてる」は中国地方の方言であり(徳川 1989 : 1943)、*bobura* や *heka* も中国地方方言からの借用であると考えられる。また *ogo*、*hinoshi*、*giri-giri* のような古語と言えるものも、中央語には残らなかったが方言として残りハワイに渡ったことが要因であると思われる(島田 2014: 510)。このような語は他にも多く存在すると考えられ、日本語の方言に関するさらなる調査も必要であると考える

9. 今後の研究

本稿でハワイ英語におけるいくつかの日本語起源の単語を取りあげ、意味論や音韻論といった言語学的特徴について考察した。今回の予備調査で上述の言語内的要因以外にもいくつかの言語外的要因が課題として浮き彫りになった。例えば、使用している集団（社会範囲）が日本語を話す一世に限られているか、ハワイ英語を母語とするバイリンガルにも使用されるのか、ハワイ英語モノリンガルの２世、３世以降の日系人も使うのかどうか、それとも日系以外にまで広がり「汎民族的(pan-ethnic)」となり中国系、白人系、ハワイ先住民系などのハワイ州民全般での使用がみられるかどうかということである。さらに社会言語的「スタイル」の問題もあり、ハワイクレオール英語というくだけた身内同士で使われる下位変種に限定されるか、改まった場面で使用される「ハワイ標準英語」においても使用されるか、といった要因も存在すると思われる。表 1 でそうした情報を部分的に載せているが、今後は単語ごとのより詳しい情報について確認していきたい。

謝辞

The authors would like to express their appreciation to Ken Rehg, Joel Bradshaw, and particularly Kent Sakoda, all of University of Hawaii, who kindly offered us advice, guidance and information vital to this project.

参考文献

足立 聿宏 (1983)「ハワイ日系人の言語的同化過程とその社会的背景 (1) (2)」『関西外国語大学研究論集』37: 87-105; 38:117-133

阿刀田 稔子 (1975)「ハワイの日本語読本の編集」『日本語』15-5

安倍 勇 (1965)「ハワイと日本語」『言語生活』 167: 81-88

井上 史雄 (1971)「ハワイ日系人の日本語と英語」『言語生活』236: 53-61.

井上 史雄 (1999)「ハワイの日本語」『日本語学』18-3:43

ウエハラ ユクオ (1965)「ハワイのくらしことば—日系単語—」『言語生活』5-11

ウエハラ ユクオ (1966)「ハワイ独特の生活日本語」『日本語』6-5

大島 一郎 (1976)「ハワイ日系一世とその言語生活の一面 (研究発表・討論の要旨)」『都立大学方言学会会報』68

北原 保雄 (編) (2010) 「明鏡国語辞典 第二版」 大修館書店

釘本 久春 (1964)「ハワイの日本語」『日本語』4-9

釘本 久春 (1965)「ハワイの日本語 (3) ～ (7)」『日本語』5-1 号、5-2 号、3 号、4 号、7 号

釘本 久春 (1966)「ハワイの日本語—日本文化の普遍性・日本語教育の現状—」『日本語』6-1

黒川 省三 (1975)「ハワイの日本語・一世の人称代名詞使用を中心にしての一考察」第21 回日本方言研究会にて口頭発表

黒川 省三 (1975)「『ハワイの日本語』研究の問題点 (研究発表・討論の要旨)」『都立大学方言学会会報』65

黒川 省三 (1976)「ハワイの日本語　一世の人称代名詞使用を中心に」『言語』5-9

黒川 省三 (1978)「ハワイの日本語　日英二重言語話者による両言語切替使用状態の一考察」『言語』7-10

黒川 省三 (1979)「ハワイの日本語」『社会言語学シリーズ2 ことばの諸相』

黒川 省三 (1983)「ハワイの日本語」『現代方言学の課題　社会的研究』 平山輝男博士古希記念会編, 199-220. 明治書院.

小林 素文 (1982)「ハワイ日系人のバイリンガリズム」『愛知淑徳大学論集』8

塩田 良平 (1967)「ハワイの日本語と日本文」『国語国字』43

島田 めぐみ (2006) 「ハワイの英語新聞に見られる日本語からの借用語」『東京学芸大学紀要人文社会科学系 I 』57:115-123

島田 めぐみ・高橋 久子 (2012)「ハワイに残る日本語『おご』を一例に」『東京大学紀要 人文社会学系』63: 81-88.

島田 めぐみ、高橋 久子、本田 正文 (2014)「ハワイにおける日本語語彙の共通語化」『東京学芸大学紀要　総合教育科学系 II 』65: 505-516

武田 守正 (1968)「ハワイの日本語」『高校文芸』2-2

徳川宗賢(1989)『日本方言大辞典』(小学館

野元 菊雄 (1973)「ハワイにおける日系人 (4) ハワイ日系人の言語調査」『数研研究リポート』33

野元 菊雄 (1974)「ハワイ日系人の日本語能力」『計量国語学』68

ハナシロ・チャド、島田めぐみ (2011)「ハワイにおける日本語語彙の認知に関する研究」世界日本語教育研究大会にて口頭発表、中国・天津

比嘉 正範 (1974a)「ハワイの日本語」『現代のエスプリ』 85: 178-197

比嘉 正範 (1974b)「日米教育文化協力事業 ハワイの日本語の社会言語学的研究」『学術月報』26-11: 29-35

平山輝男 (1992)『現代日本語方言大辞典』明治書院

Bickerton, Derek, and Carol Odo (1976) *Change and Variation in Hawaiian English. Vol. 1: General Phonology and Pidgin Syntax.* Washington, DC: National Science Foundation.

Bickerton, Derek. (1977) *Change and Variation in Hawaiian English, vol. II: Creole syntax.* Final Report on NSF Project No. GS-39748.

Booth, Marlene & Kanalu Young (dir.) (2009) *Hawaii Pidgin: The Voice of Hawaii* [documentary film]. Honolulu: PBS Hawaii. youtube.com/watch?v=O7X9AAeDCr4

Cannon, Garland (1981) Japanese Borrowings in English. *American Speech* 56: 190-206.

Cannon, Garland (1996) *The Japanese Contributions to the English Language: An Historical Dictionary.* Wiesbaden: Harrassowitz

Carr, Elizabeth Ball (1972) *Da Kine Talk: From Pidgin to Standard English in Hawaii.* Honolulu: University Press of Hawaii.

Hatta, Kayo (dir.) (1994) *Picture Bride* [motion picture]. United States: Miramax Pictures.

Hatta, Kayo (dir.) (2005) *Fishbowl* [short film]. Honolulu: PBS Hawaii. youtube.com/watch?v=NNCI2W_mqUQ

Long, Daniel (1997) "Sociolinguistic Aspects of Japanese Loanwords in English." paper presented at CIL XVI (16th International Congress of Linguists), July 22. Paris, available on CD-ROM as B. Caron, ed. (2005) *Proceedings of the 16th International Congress of Linguists CD-ROM*, Oxford: Pergamon Press.

Long, Daniel (2001) "Linguistic Aspects of Japanese Loanwords in English." 『都大論究』38: 1-22

Nagara, Susumu (1972) *Japanese Pidgin English in Hawaii, A Bilingual Description* Oceanic Linguistics Special Publications No. 9. Honolulu: University Press of Hawaii.

Paguriga, Rodney & Spirit Sooga, Betty Esene, Iysha-Ann Taguchi Mason (dir.) (2009) *Ha Kam Wi Tawk Pidgin Yet.* [documentary film] Honolulu: Hawaii Council for Humanities, Searidah Productions and Charlene J. Sato Center for Pidgin, Creole, and Dialect Studies, University of Hawaii. youtube.com/watch?v=NesfQ2oNBcA

Pidgin Bible Translation Group (2000) *Da Jesus Book, Hawaiian Pidgin New Testament.* Orlando: Wycliffe Bible Translators.

Reinecke, John (1969) *Language and Dialect in Hawaii: a sociolinguistic history to 1935*. Stanley M. Tsuzaki. ed. Honolulu: University of Hawaii Press.

Sakoda, Kent and Jeff Siegel (2003) *Pidgin Grammar — An Introduction to the Creole Language of Hawai'i*. Honolulu: Bess Press.

Simonson, Douglas, Ken Sakata and Pat Sasaki (1981) *Pidgin to da Max*. Honolulu: Bess Press.

Simonson, Douglas, Ken Sakata, Pat Sasaki and Todd Kurosawa (1992) *Pidgin to da Max*. Honolulu: Bess Press.

Simonson, Douglas, Pat Sasaki, and Ken Sakata (2005) *Pidgin to da Max*. Honolulu: Bess Press. (combining 1981 and 1992 books)

Tonouchi, Lee A. (2005) *Da Kine Dictionary*. Honolulu: Bess Press.

Yamanaka, Lois-Ann (1996) *Wild Meat and the Bully Burgers*. New York: Harper Collins.

(Daniel Long・首都大学東京教授)
(ながと　まさひろ・首都大学東京大学院博士前期課程)

Japanese Origin Loanwords in Hawaiian English

Daniel Long
Masahiro Nagato

In this paper we examine some Japanese Origin Loanwords (JOL) used in Hawaiian English (HE). We are initially assembled a list of such words gleaned from comic sources such as *Pidgin to da Max*. Based on additional information on many of those words provided to us by Kent Sakoda, we perform some preliminary analyses to explore possible topics for future research into this topic. These include topics about the origins of the words in the first place.

(1) words that seem to have multi-causal etymologies, i.e. are the results of coincidental similarities with words from other languages (HE *taran* ← Jp *taran*, Tagalog *taratado*)

(2) words that originate in dialectal forms of Japanese as opposed to Standard Japanese (*habuts* ← western Japan dialect *habuteru*)

(3) words that are loan translations from Japanese (*chicken skin* ← *tori hada*)

Topics also include changes that occurred when or after words were borrowed into HE that have resulted in differences between HE words and the original Japanese forms.

(4) ways in which HE words have shifted in meaning from their etymons (HE *taran* "stupid" ← Jp *taran* "insufficient")

(5) ways in which HE words have changed in pronunciation from their etymons, such as the loss of the phonemically significant geminate consonant of (HE *kapa* ← Jp *kappa*; HE *teka* ← Jp *tekka*)

(6) ways in which the JOL have been influenced by English morphology such as the plural endings of *zoris*.

(7) changes in part of speech from the original Japanese, such as the Japanese noun *bachi* being used as a verb in HE

Other promising topics range from English phonology to sociolinguistics.

(8) unlike (6) in which JOL have changed in pronunciation to fit English phonology, are cases just the opposite in which JOL has imposed change on HE phonology, adding to the phonemic inventory, e.g. *karai* "spicy" pronounced not with the alveolar approximate sound [ɹ] of American English, but rather the flap [ɾ] used in Japanese.

(9) sociolinguistic usage topics such as whether a specific JOL is used in the English of (a) immigrants who speak Japanese as their 1st language, or (b) Japanese-Americans who speak some Japanese as a second language, or (c) Japanese-Americans who can not converse in Japanese, or (d) Hawaiian residents of non-Japanese ethnic origins